

戦争反対「すごい党や」

「日米安保条約反対」の国民の声が全国津々浦々にとどろいていた1960年、香川県で生まれました。

共働き家庭で「おばあちゃん子」として育ち、人を笑わせるのが好きな子どもでした。

■「人の役に立つ」

「よしき、人の役に立つ人間になりなさい」。祖母の口癖でした。青年時代は、人の役に立つ生き方は、どうすればいいのかと日々、真剣に悩みました。

「とにかく何でも挑戦してみよう」。合格した鳥取大学の入学式当日、自治会のクラス委員にすすんで手を上げました。

その日の夕方、先輩から民青同盟に誘われた山下さんは、共産党と関わりのある組織と知ってパニックになります。祖母の教えにはもう一つ、「共産党にはなったらいかん」とあったからです。

けれども、「クラス委員は、自ら手を上げたから責任を持ってやらなければ」と学費や学内要求実現のための署名に取り組みます。

自治会の活動をすればするほど、民青や共産党の先輩たちがよく勉強し、行動していることがわかりました。「自分も勉強したい」と民青に加盟します。

祖父母の話で「戦争は怖い」と感じていました。民青で学ぶなかで、日本共産党が侵略戦争に反対し、どんな弾圧にも屈せず、命がけでたたかってきたことを知ります。

「すごい党や。日本共産党に入って信念を貫くことが人の役に立つ生き方になる」と確信し、入党しました。

実家の仏壇に手を合わせる山下さん。「おばあちゃん。教えの一つは守りました。一つは乗り越えました」



山下さん1歳の頃。祖父母と生まれたばかりの弟と一緒に1961年

■現場で学ぶ原点

大学卒業後、大阪かわち市民生協（現在のおおさかパルコープ）で職員として働き始めます。

できたばかりの市民生協は、ほとんどが20代の若い職員で、残業が多く、昼休みも取れない忙しさでした。

「なんでこんなにしんどいねん」。労働組合で話し合い、実態調査を始めます。ストップウォッチを手に作業を記録し、仕事の改善方法を何度も議論し、ついに昼休みが取れるようになりました。

駐車場でテニスに興じ、一球打つごとに「これが昼休みかあ」と喜びをかみしめました。

“大阪のおばちゃん”にも鍛えられました。当初「生協運動と言っても、おばちゃんたちにどんな議論ができるんだろうか」と思っていました。

食品の安全や平和運動に取り組む女性たちの「食べて、しゃべって、勉強して」というパワーを目の当たりにし、「僕は自分の頭の中で考えてただけやった」。このときの経験が現場で学ぶ“現場主義”の原点になります。

配送で「卵、割れてるで一」と笑う女性たちに圧倒されます。配送の卵が割れたり、ひびが入っていたら、1個につき10円を返金していました。

山下さんは振り返ります。「その10円がうれしいんですね。そういう“生活の感覚”からみると、消費税増税があかんのは当たり前。いまの活動につながる『生活』の大切さを教わりました」

「朝ご飯と洗い物」担当

市民生協の職員として働く山下よしきさんに、人生の転機が訪れます。「民青の専従をやってもらいたい」との要請に「自分を鍛える場になる」と引き受け、日常的に政治に携わる専従活動家の道へ。

平和や食品の安全に情熱を傾けた生協時代の経験も生かし、民主青年同盟北河内地区委員会の委員長として同盟員と向き合い、運動の先頭に立ちます。

忘れられないのが、生協職員時代からすすめていた核兵器全面禁止を求める運動です。地区委員長に就任した直後の1985年、日本原水協を含む11カ国の反核団体がよびかけた「核兵器の全面禁止・廃絶のために―ヒロシマ・ナガサキからのアピール」署名に高校生たちとともに取り組みました。

■いいお兄ちゃん

友人の疑問に答えたいと勉強する子、学校の全校生徒の半数から署名を集めてくる子と、高校生の真剣な姿に励まされます。

「だれとでも友達になれるし、(訴えも)上手に話せてすごい人」。当時、同盟員だった女性(44)は駅前で元気いっぱい、次々と署名を呼び掛ける山下さんの姿を覚えています。「山下さんは、班会でも、私の突拍子もない質問もばかにせず、楽しく答えてくれました。国会議員の今でも笑顔は同じ。「いいお兄ちゃん」のイメージは変わりません」

「アピール」署名は15年後の2000年5月、6000万人を突破し、国連総会で報告されました。「核兵器全面禁止のアピール」署名に引き継がれ、草の根の運動として発展しています。

「あのとき、街頭で学園で職場で一生懸命に訴えた彼らの頑張りが間違いなく日本と世界の歴史をつくっています。国民の力はすごい」と山下さん。

妻、五月(さつき)さんと結婚したのも民青地区委員長時代でした。結婚間もない頃、ある女性同盟員の言葉をいまも、はっきり覚えています。



妻と三男(左)と一緒に趣味の登山へ
|| 2010年7月19日、金剛山

■「やったってる」

女性同盟員と電話で話しているとき、「ところで山下君、ちゃんと家事やってる？」と聞かれ、山下さんは「もちろん、やったってるよ」と答えました。

「いま何て言うた…？」と不信そうな女性の声。再び何気なしに「家事、ちゃんとやったってるよ」と答えた山下さんに、女性は「山下君、「やったってる」という言葉の中には、家事は女性がやって当たり前、手伝ってやっているという感覚が出てるとずばり。山下さんはハッと気がつきました。

「家族を大事にしない人が外でいくらいいこと言ってもダメ」との五月さんの指摘から、朝ご飯は家族で必ず一緒に食べることにしました。東京の議員宿舎にいる間は、小学生の三男へ「モーニングコール」を欠かしません。

多忙な国会議員生活でも、大阪の自宅に戻ったときは、「朝ご飯づくりと洗い物」は山下さんの担当です。

14日、党府委員会が開いた「賃上げと安定雇用についての懇談会」の朝。「なめこと、エノキ、ニンジンのみそ汁、ホウレンソウのおひたしにご飯」をつくりました。

国会で首相や大臣、官僚との丁々発止のやりとりで興奮した頭と体を切り替えるのに、「料理はちょうどええんです」。にっこりとほほ笑みました。

③初当選の原点

「あったかい連帯」胸に

1992年参院選で日本共産党の比例候補として活動した山下よしきさんが、95年参院選の大阪選挙区候補として活動しているとき、阪神・淡路大震災に直面しました。山下さんは「被災者生活再建支援法」成立までを経験し、「どんなに壁が厚くとも、国民とスクラムを組んでたたかうなら政治を動かすことができる」ということを痛感しました。

■自分たちの手で

日本共産党は大震災当初から、被災者の生活・住宅再建のために政府として個人補償に全力をあげるよう要求してきましたが、当時の自民・社会・さきがけ連立の村山富市政権は「生活再建は自助自立で」と被災者に背を向け続けていました。道路や港湾が復興する一方で、被災者の生活は置き去りになっていました。

半年後、定数3の大阪選挙区で参院議員に初当選し、災害対策特別委員会に加わります。被災者の声を繰り返して国会へ届けますが、一向に進まない状況にいらだち、「国会議員って、こんなに無力なのか」「政治に何ができるのか」と自問自答する日々でした。

被災地をはいずり回るなか、多くの市民と出会います。

「政府がやらないなら、自分たちで被災者支援法をつくらう」。被災者や支援ボランティア、作家の小田実さん(故人)ら市民と始めた運動が次第に世論を動かし始めました。

山下さんは、被災地選出の各党派議員に声をかけ、超党派の議員有志の勉強会を立ち上げました。「今後同じような災害が起こったとき、公的支援がなければ同じ苦しみを味わう人たちを生むことになる。(制度は)この時代に国会に身を置くものの使命だ」の思いが強かったといいます。



小田さん(右端)とともに被災者支援法実現へむけて
毛行進する山下さん(左端)。中央は緒方靖夫・現党副
委員長。1998年3月1日、東京

「国会議員は何をもたもたやってるんだ」と怒鳴られたことがあります。小田さんに「よく耐えた」とたたえられます。山下さんが「形にこだわっていたら法案化は間に合わない」と小田さんたちに意見し、議論を進めたことも。

■被災者の支えに

その支援法が98年に成立。改正をくり返し、自然災害による住宅被害に応じて、75万円から300万円まで支援金ができるようになり東日本大震災被災者の支えになっています。

「阪神で被災した人たちは、自分たちは一円も受け取らなかったけど、東北の人の役に立っていると話すと、喜んでくれます。これこそ社会の進歩であり、人間の連帯です」

「若さと経験を生かし、21世紀にふさわしい新しい国づくりに大いに挑戦してほしい」と期待を寄せた小田さんは07年7月30日、山下さんの2期目の当選が決まった投票日に亡くなりました。

小田さんや市民との共同を大事にしてきた山下さん。阪神・淡路大震災発生の日1月17日は可能な限り神戸に足を運んでいます。

「あったかい人間の連帯を国の政治に」の思いを胸に現場に駆けつけ、「現場の空気」を肌で感じ、ともにたたかう—山下さんの活動は、ずっと市民・国民に支えられています。

④バッジが外れても

労働者は将棋の駒と違う

2001年。大阪選挙区候補として2期目に挑んだ参院選で山下よしきさんは、59万4千票を獲得したものの、およそ8000票差で惜敗します。

山下さんは議員バッジはなくなったものの、日本共産党中央委員会が設置した「リストラ反対・雇用を守る闘争本部」(本部長・市田忠義書記局長)の事務局長になります。

弱肉強食の「構造改革」路線を突き進む小泉自民党政権のもとで、自動車、電機、鉄鋼、情報産業などで退職強要や転籍(解雇)を迫る激しい「リストラ・人減らしの嵐」が吹き荒れていた真ただ中でした。

■NTTの横暴に

党は「大規模なリストラに反対し、雇用を守る国民的たたかいをよびかけます」を発表し、本格的な国民的闘争をよびかけました。

ある日の朝のことです。上京して活動するため、大阪の自宅近くの駅に向かった山下さん。薄暗い午前5時すぎの駅のホームで、NTTで働く男性に出会いました。

「早いですね」と声をかけた山下さんに、男性はいました。「これから名古屋に出勤するんです」

NTTは11万人リストラを強行していました。賃金を3割削減したうえで、子会社に再雇用するというやり方で、転籍に同意しなかった労働者をみせしめのため、大阪から名古屋などへの広域配転を命じたのでした。

山下さんはNTTの横暴に、怒りが込み上げてきました。「労働者は将棋の駒と違う！」

男性は仲間とともに提訴し、10年、最高裁で勝利。日本共産党も国会でこの問題をたびたび取り上げてきました。

男性は振り返ります。「山下さんには悩みも愚痴も話しました。大阪や東京の集会にも来てくれ、議員に戻ってからも親身に相談を受けていただいて、本当に心強かった」



調査・懇談する党国会議員団。
右から山下、宮本、塩川、吉井の
各氏。2001年、10月12日、
松下電機本社

■全国を駆けめぐる

山下さんは、職場の労働者への聞き取りとともに、大企業の工場閉鎖・海外移転が地域に及ぼす被害や、増大する失業者などリストラの実態調査へ全国各地を駆け回りました。

自治体幹部からは「まるで夜逃げだ」と吐き捨てるような発言も飛び出しました。前ぶれもなしに突然通告される大企業の工場閉鎖は、ほとんどが「寝耳に水」です。たちまち数百人が失職し、自治体にとっては再就職問題や跡地利用の難問がのしかかります。

「当時、毎日、一部上場企業・グループのリストラ計画が報じられ、その数は60万人にも達しました。地域のみなさんと怒りを共有し、雇用と地域経済を守る共同を広げられ、とても勉強になりました」と山下さん。

「山下さんとは初めて会った気がしなかった」と話すのはともに実態調査に回った岩手県紫波町の村上充元党町議です。「岩手の言葉で言う『いらぶらない人』。肩書にこだわってしゃべるのではなく、相手の気持ちを引き出しながら話す、謙虚な人。『地域の衰退をほっておけない』と全力で取り組んでくれる、そういう人だったから長年付き合ってきたように感じたんでしょうね」

山下さんは07年に参院議員に返り咲くと、財界・大企業の身勝手に「待った」をかける活動に全力でぶつかります。

「無法は許さない。憲法や労働法に基づき、『職場のルール』と地域経済を守れ」

バッジは“国民の瞳”

思いをめぐらし、仕上げた質問原稿に力いっぱい、こう書き込みました。「彼らの『誇り』と『悔しさ』をつめこんで！」

■原稿に思い込み

山下よしきさんは、自らを奮い立たせる意味も込めて、質問に臨む姿勢を原稿に記しています。先の言葉は、東日本大震災の被災地、宮城県で起こった電機大手、ソニーの雇い止めを取りあげたときのものでした。

ソニーは大震災から2カ月後、震災を理由に正社員280人を県外配転し、期間を限定して契約している従業員(期間社員)150人を雇い止めにする事業縮小計画を発表しました。期間社員の大半は20代、30代で、震災後、被災者でありながらも、ただちに工場にかけつけ、工場内の泥をかき出しました。やっと復旧のめどが立ち始めた矢先の解雇通告でした。

「彼らは身分こそ非正規だが志はプロフェッショナルだ。政府として大企業に雇用を守る社会的責任を果たさせること、雇用を守る中小企業を本気で支援することを強く求める」。鬼気迫る山下さんの質問に他会派からも、「そうだ」の声が何度も上がりました。

質問終了後、質問を傍聴した期間社員の青年たちが山下さんのもとを訪れました。

「今回、(思いが)少し届いた気がしました。泣かないと思っていたけど、やっぱり…」と声を詰まらせる男性。力強くうなずきながら聞いた山下さんも、瞳が潤んでいました。

粘り強くたたかった期間社員らは、震災から1年が過ぎた12年4月、解雇を撤回させ、職場に復帰しました。「『やった』と思わず大きな声がでました。わがことのようにうれしい」と山下さん。

全参院議員のなかでトップを誇る184回(12年12月末)の質問の一つひとつには「胸のバッジは、みなさんの瞳」であり、自分は「代弁者」だという強い思いが込められています。雇用と労働、震災復



国会質問後、ソニーの期間社員らと懇談する山下さん(右から2人目) 12011年7月22日、参院議員会館

興、子どもの貧困や生活保護バッシング、公立病院・医師不足、橋下・「維新」の憲法違反の「思想調査」など、国民目線で政府を追及してきたテーマは多彩です。

■真剣勝負の国会

首相や大臣に真剣勝負で挑む国会論戦。山下さんはいいます。「論戦に負けない土台は何か。直接話を聞かせてもらった人たちの中にある真実です。首相や大臣はその声は聞いていない。僕ら議員が寄って立つものはそこなんです」

空調機器大手ダイキン工業による雇い止め撤回を求めてたたかう男性は、山下さんに初めて会ったときの驚きを隠しません。「話を聞かせてほしいと来られた時には、すでに調べ尽くしてありました。山下さんと話すなかで、これは自分たちだけの問題でない、非正規雇用の仲間全体の問題なんだという思いを強くしました」

労働者に話を聞くときは、一言一句残らずノートにメモするだけでなく、徹底してデータや情報を調べあげます。「僕らは当事者じゃないけれども、当事者に代わって質問する。生半可な知り方ではあきません。財界・大企業の側に立つ首相や大臣にも『人としてこんなことを許していいのか』と全力でぶつけたい」

(おわり)